857
147
帝国図書館蔵書之印

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄 3巻』 請求記号 857-147
ガラス使用

八雲云 相坂 たのすきされるいせ三河
邪照云さねろと
さなろうと云 ○
ろろすきをえな
すきと同心ほ
五音通なり
○大和物語 ちのくよみ
ろうまのろさなろう
ろう君さねとよのむい
くろそ
順和名五味さね
ろう 蘇敬曰五味
佐弥加豆良 皮完
芋酸 核中辛苦都
有鹹味名五味也
○万葉中つくミ
たき山はさなろう
なもろうすあん
ろう島よ
中つくミたれう山
の麻名菖あうとも
いうもあしめる
立も

百人一首抄中

三條右大臣 定方内大臣 高友二男
母宮内大輔孫益女
内舎人 中納言
勘修寺家祖
良門 刑部大輔 正五下越前守
兄中將
利基 兼輔 惟正 為時 紫式部
従五位下
困学院左大臣
冬嗣六男
後撰下巻以憲上
高藤 勘修寺内裏
定国 泉大將
定方 右大臣左大将
三条右大臣

詞書よ。女乃ろとま片ろ山ぬ
と云ふ文字ぬ。ぬ。ぬ。
けくら詞なろう。寝のふ
さねら片ぬ。ぬ。ぬ。
なれ。ぬ。ぬ。ぬ。
ひろ。ぬ。ぬ。ぬ。

校衣は男に生るのち中くわれしきこえなうめきぬしりけるなるべしの乃家乃名おなりしあつ夜山のさねなる公しれねホ中えうはありふらもて文字法と独と高位ちり置うよきとなり

○八雲云小倉山月雪霧 春 紅葉 大井也 詠花例 亭は院哥合有之 不難 小鞍峯ハ大和也又思ふおもとのこねあり れ一かのとくゝ見字侘言なるなり

○小倉山のお楽心あるハ山ニなれけるあきまたるを

と云なるべ。けるハ何つゝて。更なる国をく侍り一枝のうゝとみも。新勅撰ゝたけ秋お

かゆ。いれ中。ゝくゝ。まゝとゝそみんなる。

ゝれて乃文字ゝ。法皇流ゝ自ゝ。

は儀ハ今まて侍ふ。ゝれゝのゝ

まゝて。ゝくゝハいゝゝんゝ。ゝ侍ゝ。ゝ

○貞信公 忠平 拾遺三ノ 小一條太政大臣 昭宣公四男

閑院左大臣 忠公 聖寛 経忠

冬嗣 良房 基経

時平 本院贈太政大臣

仲平 枇杷左大臣

兼平 中納言 宮内卿

忠平 封信濃国貞信公賜正一位 九條右丞相

師輔 摂政関白号五條太政大臣

○郁芳集 林の山ゝ

のそむ

けるれハ小倉の

山乃お楽こもそこ

さてゝてみゝゝ

ゝゝのみゝと大井

ゝ行幸せさをた

てまるけの高ゝ

題の次ゝ

林の水ゝゝ

林の山ゝのそむ

もこゝもあり

のゝゝれきく

はゝすゝゝ

ゝていのゝ

山のれゝまるなく

かゝゝれゝゝ

入江の松ゝゝ

如夢僧都 大井川の行幸ニ三衣の第の座ゝ舞帽ゝを用ゝて

河ゝ云ゝ。ゝ院。大井河ゝ行幸ありて。行幸もゝ

ねきゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ

泉天王の西門
まえ川風の水上
ゆくうけるようす
出てゐる名をうり
嘉元院昌泰元年
十日 廿日 大井河和
歌 作者
と一首とハ院の三名
きハ有り所なるなり
と又 天王のみゆき
をもてとなり

○絶久恋と題不遇○
恋をとゝ
○恋百 拾云泉川ハ
挑川也天智天皇の比○
時異国人せめきて
かの川を一ツて合戰
をいとむあるゝ云
詞也 其を泉川と云
くゝるなり 今の本

て所のなを山ゐのお堅えの山あるハとなん
をけ。かゝてゐ歌ハ行たれ所と異
ゐけ。ことゐ歌ハ行たれ所と異
ゐ。ことゐ歌ハ行たれ所と異
ゐ。ことゐ歌ハ行たれ所と異
ゐ

もあり　みのたち
をかたらと
よりむなり

○
後拾遺　天補
山里は冬のたより
人めも
卒忠盛

○
定家卿山家夜霜
冬ちまさ人めも

排河やぶ　しけ　はつ　みそ　みしるぶと。
つとめる通　もろ　ぶ　り
源宗于朝臣　右京大夫正四位下　續古今作者
光孝天皇　是忠親王　宗于　閑院
三光院御　説如此　但帝皇系圖不載之荷
或説光孝天皇御孫　致正子云　致正又帝王系圖無之　右京大夫
山里冬　さ　さ　ま　り　人　も　れ　ば
冬　ぶ　そ　よ　ま　り　山　里　は　四　ま　れ
しきものなり。平中　物　き
なり。ぶ　ば　ば　年　の　こ　ま
さの人めを　ば　り　て。
おももれゆく　ぶ　め

ぬ　ま　り　あ　き　わ
を　ま　し　ら　れ　て
新後撰山時道
分　て　今　人　め　ば
れ　ぬ　し　ば　け　り
ま　の　冬　の　冬

○
日東本紀曰天仁義
令九河内連等祖
大鏡云延喜内時亭
ぶ　ば　ば　ば　ば
冬　り　忠　冬　ば　恒
か　と　ば　ば　出　ば　め　き
れ　て　の　け　り　冬　よ　四
月　二　日　な　り　ま　る
冬　の　ひ　ね　の　ま　て
いこ　う　け　し。

○
おいしまもも
天陣彦根令是
乳別内裏山代直等
祖也　これ　ま　き　と　乃
る　乃　吹　さ　ま　ま　ま　き
の　後　冬　ま　と　め　り

絶　る　さ　海　を　逸　し　と　て　去　秋　と　り　よ　さ　り
き　心　と　く　ま　り　り　つ　た　て　で　み　の　と　み　る
し　と　云。梅　冬　そ　の　冬　の　冬　よ　山　里　は　の　八　父
冬　ま　ま　り　を　付　て　し　三　光　院　は　伝　な　り
九河内躬恒　古傳　光祖不見甲斐小目御厨子所預
近　乾七年正月十三日　任丹波権大目後任二
渓路縁祈注行年孫惟利　ま　か　め　り　い　な　り
又甲斐小目良　る　子　云　云
心　ま　ま　り　い　や　ま　ん　初　冬　の　と　き　ま　と　り　る　白　き　と　ば
白　事　れ　花　と　ま　め　り　と　ま　り　ま　て　か　り　り　や　と　ま　ん　と
ハ　宣　河　ま　り　ま　か　ば　ま　と　こ　ま　ば　せ　め　と　云　る　ま　り。
い　ま　れ　も　ま　る　ま　ま　ま　と　ま　り　ま　く　と　と　ま　ま　ま　し

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄 3巻』 請求記号 857-147
ガラス使用

祢なり

新勅撰　左兵衛督公行

月ゝ新よりの色とはなれぬ
白雪ハ心あてなる
ものなり

大貳三位

いかれとも分て折へ
き月新よりいろ
まさりゆくくのむ

定家卿

心あてにこそくもわ
し梅ハ花ゆ子里の
ものなれはゆき

うゝふ色しるしうゝ
と入てみるかのゝ
たみうゝわゝ
とゝう白きこの
雲乃ゝうゝ
乃ゝゝ風ハ
のゝ
といゝ
ハゝ
ゝゝ
きゝ
ゝ
ゝ

能因哥抄云　十五日より後の月

縁語抄云　大方八十四あり

月ゝゝ
あゝ
とゝ
くゝ

奥義抄云　月ハ
明ゝ
明乃月ハ
ゝ
みゝ
わゝ
ゝ

壬生忠岑　右兵衛府生本名忠衛ゝ泉大將定國随身

右衛門府生　御厨子所　定外膳部　按使大目

有明乃つれなくみしかあり恨ゝゝ
名残乃ゝゝ
業平朝臣集ゝ
乃ゝ
集ゝ
仲麻呂ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

○八雲云暁 万葉ニ
安部登詩ともそう
歌 夜更
○水無瀬の合サ四
面氣も行かむ月き
別まて 法れすく 春
きぬのろ
右ろ宜や行くを
かいのよとろる
そろまて月なを
やう行くし 俊老や
そてけなすも月ハ
行くねやとト道
ハ滅まさそ行くん
とやりし行ろて縁
まろり行や
○六百番哥合暁恋
九 右家歌
法れかきのあつれ
まてやハつくぬ月
とめてしそのて
右 陰信
右方申云有明乃
法れすくみしあ

新古今の歌とも。仍為流ハ哥とあるの心を不用云々。乃ち心ハ人のもとへたれ
ぬれ。いとをんとをもわすれて。ぱ。月の
ぬれぬ。ぬるれも物をさとをもつくるあや。
たとへるものろ。つきをもつくるそは
ろ。ろ。きを。法るあるをしてあるを
ぬりりむて。ろ。の後ろ
めしをしなりぬるきりを
陸ろ云ろ。量れなのハなりた
ろりきを云ろや。ぱ。降をくれハれを云
字ぬもゆをすを。落る朋後のハ俊成

定家卿陰古今并二の字ハ法れをと云
あるけるぬ。ハ法れをとををる。
俊成をぱ云をもをつをの法をを濁
と云をを。ぱ云ぱ。ぬりりあるけき
ををりのを成をとをり。定家をつをを
ををる。題俊方朋代のををををを
ハつををを。俊成やりををを
をのをを。全東朋代乃を海あく
ををををををををををををををを
ををるゆを。ぱ。朋代ををををを
ぬく。ぱ代ををををを。ををを
ををををのををををををを云

○坂上是則 大内記 従五位下 加賀介 御書所預

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄 3巻』 請求記号 857-147
ガラス使用

阿仏尼
四条乃ゐたのそ

○

つし遍昭僧正のむ
すめ[illegible]
[illegible]
[illegible]

○云云 荒せとハ白川の
法師乃上方ゝ惠慶
法師ゝ陸士寺乃
和尚の序ゝ也 月の
さえのまよゝ花て荒
せの山乃紅葉とゝけ
ゆ 荒せハ山城の方ま
しまゝ祈志賀の山
越ハいとゝ也 ○や
古今 秋部 云志賀
山越ましてよゝ
山川よゝ色のけゝ

○頼集云九月ゝ志
賀への山越い人々兵
衛尉忠君屏風ゝ
山ゝ紅しのゝせゝ
ミちの紅ハいさし
なゝそゝ色々ゝ
よけゝ

○十月志賀山越の
ゝ 西宮屏風
ゝ云云 八月ゝ

本ゝ紅葉なれなゝ
ましてハかし
くゝ色ゝ色ゝ
高葉乃ゝ
せきゝ
ゝ
ゝ

極えは初のそゝミ
みけてうゑのせき
まさゝのいと
○定家
来ぬすてらせの山ち
ゝみけりそ
いとまぬ物の
れる

○八雲云久くゝとあや一部
久方の天物をてくる習
りり

○万葉
久方のこゝやこはきて
苔おまそゝいゆく
云ていはしまし
那賀云久空と月
し云天元と云
ハゝ一れとも敬
ゝ

○万葉
或久国と云或ハ久方とかくされハ
ゝやこと役て久
かゝゝゝゝ

○拾正集
天くゝのゝちのゝき
くく林のよハ月乃
けまくゝ
○大和物語
ゝ
さみゝれて
こゝゝ
なゝれ

○円　原大納云
あくゝ
なゝ
とや

○忠家
ゝ
ゝ

これハ秋ゝ
ゝ
なゝ
ゝ
ゝ

後撰

おもひてそふさりうの
のとけさとなのの
こころうつるく
らん

○新古今哀

藤原為家朝臣

まちいでゝ
まちてのこの方の月
のとけさやこの夜
自

○藤原興風　或説下總權守正六位上治部少輔

号京多參議大政大臣　五位下　正六位相模掾　武蔵國國司

磨ー濱成ー永谷ー道成ー興風　道成子云

作和哥式　皇后宮亮

○みるかしらくなせむ方秋の松昔はなきなくま
題をとりあつめなるこの手をたてゝ後いまゝ
とりあつめなるこの手をたてゝ後いまゝ
なれしんく或はけさせり

月多秋夜

○秋の松むしの
よあつまりけり　松ゆ
くすはすゑの月
拾遺集よつゝき
作りて歌作者
比人のさしくせ
けりをそよみて
作りけり
つゝよりて山
ものとゝ秋の松
我とや友と言

月多秋夜

○秋の松むしの
よあつまりけり　松ゆ
くすはすゑの月
拾遺集よつゝき
作りて歌作者
比人のさしくせ
けりをそよみて
作りけり
つゝよりて山
ものとゝ秋の松
我とや友と言

まつ人ちるもあり或はさたちそとまち
もあり　いろくなるなりてあるこのうち
はし　明友のこゝ　しるもなき時ぞ秋
の松　こそいつ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ともあり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
山　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

河海云 貫之 童名を内教坊阿古屋と云り

或説貫之はし○初瀬の観音の示現よりて夢のまくらけさるなりけり○観音の山寺なりて多くさくらの付初瀬よりて内教坊と号するの由伝そのころ雲井坂と号し人はさそ見し梅のあるれをたのむしるしぬ程よとなり

○集よりけるとの

やり　あり

花ならしかすり心よさくらのとうくらのころろ

かるむ

餘情

紀貫之　系図友則の子とも云

童名阿古久曽云云　玄蕃頭木工権頭　従五位上　内書所預

○今はは何をかは花をもしるべかはは白雲

詞書小初瀬よりまいりけるとふやうなる人の

あるをみてくやとして行へて後はふれはと

たれをあるのあるはしかくまなむ

やうはあるとしれいてて伝きれはうこと

そうけの梅乃花をもてうとあり

古今は貫之詞をなをして入れり

貫之宿坊より中絶して来りしなり

根てやけやうはうはのとしの字

度撰やよりの贈乃月元さうまうてこあるしれを

そうて伝けるのをくまうきつけ

伝るつゆきみもこむ時そこ思

つたのまれ我ミうしあれハ行

きさろれ

貫之くくて図

寄りくまうり

八雲梅下に古今

よりくく花とよあ

しありを作ハ花

と云ハミを梅より

同梅の下に花の木

とハ是迎ての名

なり梅をしは

しし云云

所説云

人者緞と寄緞の字

いさとうまうり

つくあるはのあり貫之くくまうれね

ぱあるれうとしいて数なるぬいむし

れ者よ白れまうりなりくなる思

へてハそのくあれ梅の白れをものむ

とそうはとそもハいをいくなる

貫之あり餘情ふくきりなきなるぱ

と云しを作不云云

用いさハ必さるのとうをえなりぱ

なるも中よハあるしぱよくくをいと

と実色なもそれしとなりみさと

云しはのあハいくく心うれ白ぱやうと

つきうあるとさしてりなり餘注よ人乃

○井蛙抄云源春夫
小野道風落書也
やまの白けるゆく
やまさくらいろ人
ありさもやとお
ぼゆ

○八雲に云雪と夜
とハ或は雪と云て
不ぬ為万葉集ハ
神夜とも書り同
心同対なり

○続拾遺後鳥羽
院
ほくきすのこ
えやまちのそ
方ちるき月よ
うん

○新続古今
藤原良経
やまちりて月のこ

心ハ雪も花ハ昔の色なれけるそとうた
らしさ乃下句ハ雪とあり紙ハ色なく
清原深養父先祖不見云云一説豊前守房則男云云一説筑前守海雄孫房則子云云可尋之
従五位下内匠允 蔵人所雑色又曰蔵頭云云
夏の夜ハまだよいなから明やのそらの月やとるらん
詞書ハ月のあり明の頃ハ夜ハ
ものとあるとあり明ハ夜
明ぬるを月とあるを天ハ
月のぬれハかくあるハ
おもしろいとなくみしくあるを一し
うれしとまたよるとなくて
云云ハ明りしやうしやうとハ

ア
てみしらよの
中のそらとあく
ハるそらの風

秋風颯然新と云心
英明
露涵菊叢寒玉白
風銜松葉雅琴清
月含秋原風至則
白露降也

○古今集ハ
そうまけむきてて
いとへとも中ハるこの
さハにはよりもそうとく

中ハ
ある用ハなられとも河のうらるつ
ものなれハ
乃さ海ものなり
ものかをねハ中のうそとて
ものうて。
明ぬ月の新やうそんとあり

○文屋朝康 先祖不見 文屋康秀男云云
延喜元人云云 或説延喜二年任大舎人允云云

○白雪ハ中の岩ハ松の枝ハつねをもちはけ
ハ風のやしくハ雪きりよあるき風なり。
けしのハ別ハ心かしら菊ハの風ハ中ハ
気なり。ハ中ハ中とめねとハ雪とハ雪とてつねを
ものなれなられをぬきみるとうとて
ハるをハうり。雪の心ハ松の不をハ中とて

めの僻案抄風そこくめるハ後撰の詠なるとこそ云ふ
もよのめり云きりよふきしく色を
ふきこくも風ろ云やくもの云や

○大和物語ニ云
おとこのわすれなむしとよろこのこと
ばかりけてち○
ていたれと忘れなけるのちまいちやう
ア云云

○六帖
いうまかとありてころ
ろあるときハ白の三
をすてくこそこれ
しき

○近歌云わすれぬ

みちちの面白よ。俳諸風のわるく宮
ものはしりよ。しりとりとりの苔の衣此
くくちりみくれ紅をくいろ
くその高き気とるみくくるけ
ときなのなり

○右近　右近女将　藤季縄女　此季縄号二交野女将一

右さあ物語ちへのむまあなるゆよ右をとりて也云云
ちとて分とおもちて命れ行くるる
これくへのみくれ社をきくをそ
こころかりて令下し絶なむとちいそる
へのの後しそるときてよめるとぶいあきる
なり。但くちきれるへのとそれ行

思ー

（ゆくすえ）

（ちかく）

是ハ誓言と頼を約の詞
よの叶ふやへの忘
と云ふ云ふとよろく
わすれそちもの罰を蒙て
ちちの面ちて
きと云ふやへ源氏
の百ちりそ長
の方へ吟石上のそ
ととそちりし
そ長ちし正ちる
よ三のたのねちれ
ものちよ異
めちすること多光
ちちしーるてめれ
ことありしよ長の
方ちすよ方と
ちなそと云結六
ひこのたちそちる
かう方とちるよ上る
とハ下句よあきて
と上ちりてよむ
ことハ法れのすや
みるの意ちれ

と。恨こすて特その人乃いちちをりよ
心。むありれちりきこのなりしけそ
まこふ立の方れそこいるを。
三条院女くありをれ
ちりきそそ。
方とそこの今成情ちちいをか
この方そそ方れ心くきこちりそし
ちちしと上とこてよりなり
又大和物語ニ云季縄の歩ねむすめ右
近かきいのちやまみれなる此字墨之
おるし世界れ
ちぼりちてちちけれハそれる

後よいとりけ。拾遺愚草 わすれ方に
ゆりそらしてし人の命代わ
くもあるる　くしいえきこえ
参儀等 参濃守 左中弁 勘解由長官 天暦五年三月十日薨 七十二歳
賜源姓
廣橋大納言 正三位 中納言従三位 頭三木 正四下 従四下 左大弁
蛇峠天皇―弘―希―等―濟 淡路守
後撰 清輔
是も序のなりあるべきにこそ
ちそのの乃心ぱ
このうるふつをとくるかいのと思ひ人
ものなりまして

とも別のうれなるも
ありいとの句所上
下よりおきつくれた
同類なるもあるとも
なるう

○非名所歌 清輔朱 法師○
仍覚あそたをもと
かとらの乃くは可吟
味 亜とも〜ゆ
やこうわるや

○古今よこのを
あさちあの小松の名の
原とのふとも人をる
らやはふ人なり〜よ○
新後拾
松をミ小松の名乃
とく亜家のあまり
てよそまあ寓るあ
古哥花まハ山城と
ちろしてあり
大原 小原と同

○拾遺古今兼璧門院
廿将
あしけき小松の名
のとくいるのあまり
てかまとの神ゆ
もとう

○續拾遺
さい人のやとうれ
神ときて名高ひよ
小松の名乃ハ
いさとれ乃紀ま
近江 阿佛
ちとれるとと思
神ゆれて行ときき
とけきかとの名原
原年物語名寄巻
ゆきり大物ま
星とは三小の名
原ちそきそ神を
ちとうそ有りも花
まわ
立の山ちとうう
引ま山城の小松の
山所とをとう

感もうれとくまつむとすれもゆあま
ゆそみゆるとたりゆんゆ名山ちう
たくゆなとろろあまりてうれしき
うとちりなとうのかの方ゆのうるあ
けてうしたなとの名のちうて。
やもくときうそうるゆ名ゆ
ゆ入て吟味ゆるとと其人ゆ名ゆ
ゆうて定ゆ。ゆ名ゆの小松のゆ
きちとくゆもゆあまれ枝の文れ。
うとゆへとゆもゆ清輔ゆうきゆうと
感雑をとうて。四本の名ゆと係をとへ
のるゆ

中納言兼盛　従五位　駿河守　従四上
一説或ハ
光孝天皇　是忠親王　興雅王　篤行　兼盛　赤染衛門
出羽守従五位上　大蔵大輔博士　上東院女房
筑前守兵部大輔

○天徳内裏歌合の時
兼盛感忠見左右よつかいいてけり初句と
なを是を給て忠見
秀歌のよみいたし
なりと思て兼盛
感しいたてけりとの
事なれとも兼盛
なをすてかたく
さてすてゝ侍しよ
れけるを兼盛の
思れとなるを聞
共を秀歌なりけ
れハ小野宮殿
なくて天氣とく
なりけりと

付上京年号

恋すてふ我名ハまたき立ぬれ
人しれすこそ思ひそめしか

○壬生忠見　本名忠實　忠岑子　母　云云
天徳二年任摂津大目
こゝもてよりなるハまたき立ぬれ
同しく天徳の歌合の時前の方とつれ
なを方なり　神注ハ云ハ
まさりけるゆゑとなり　論ハ同つれ歌
ハ方なりまさりたハ
よハ前の方ハ
乃方なるしとも
なのハきこゆ
兼盛ハ
兼盛ハ

まて拾遺に入て
伝事

○一説後悔の心なり
八雲云 東の松山
陸奥 松山 讃岐
すんの松山もとも口
まり山とより
同云 讃岐こなる事の松
在清浦郡 奥さまや
有因縁とく女の
を神心なや
ちとおきてここ
とたらさら絶る
やなり

○

○

○

のさうそうあつてまいられぬはけしのはぎはとまうねとおくめさわてまるとて
ゆきさんくハようすうさうそわられる敵
忠中納言のいまはは
のあわやけとくしめ
こそまはうてすの
大るまあもるくき
りのようそかもえ
さのしうとそのさ
きれんる

○捨遺 權中納言
ゆ西坂むすの山寺
乃鄰の宮ゑ寺
はゆるる伊也
音羽川せきのてかと
を流いきるの心
乃ゑとすう郭
同云ままくしるもを
ゆまいりくしめけか
侍從は伯けとき

字憂患を始破東けいるうゑ和のゆと
ゑわてはやゆ。ゆ伊しやそハ。ゑ満
ゆりゑしハゆるゑ
ゆりゑきてうぎれとんしさのまき
るけとよ。ひしゑとかりしゆりひ
のうらそもゆ
るのくそうほとよ。ゆそるうしとハ
ゆやりしまてもるうしとるうみやれん
ゆきさしてハ。ゆうらとみそやとかりよ。
面氣とみてハ。ゆを道をんとかりひゆ
とを一てハ。一和の奥ゑとやりひ一和
てゆうゆはゆ氣ゆんとかりみゆ道ゆてハゆ
みゆとうくむ。ゆゑもゆかりひうゑ新聞

○ゆうしそ伊ゆ一河の寺
とゑて伊ゆはいうは
出ゆきゑ
同中納言 敦忠ま
うかられて後りし
の西ゆりとゆ伯ける
山里よくまうて
花見伯ける
系樣版
いま一ゆうとゆの
ゆうけん花こそ
いまハひーうし

をゆうてみをんくゆゑ。ゑの寺ハゆうく
ゆうのゆうゑハゑゑうう。胸中
のゆくゑとうひうくむ中ゆゆう。世界
の如けゆ世伝は欲ゆくゑの寺ゆとゑ山ゆ。
祇注ハゆまくゆゆハゆくいゆ
てう。一ゑれちきりとゆりゆひとゆのゆて
すきゆるとゆゆ遠て後ハゆうのゆとゑ
れとゆりゆいてまりゆハ世のゆめいとゆ
ゆりひゆハとんのゆとゆいてゆりてんゆ
いうひやきんどやゆんとやゆりゆいとゆ。
むーゆうとうゆりてゆれゆいとゆゆとを
ゆりひゆはゆるとゆゆゆゆ

○大和物語云
[illegible]

○権中納言敦忠 アナ 三條右大臣定方二男 母中納言山陰女

高藤 ┌定國
　　└定方 ┌朝忠右衛門督 従三位中納言号五御門中納言
　　└朝頼 勧修寺家流

拾遺 逢ひ見てのちの心にくらべばむかしは物を思はざりけり

拾遺抄ニ入テ後撰ノ一ニ

これ逢ひ見ての心なるべし

逢ひてのちのやせるまさりのいとかくまでなりぬべきとは

[illegible]

○大和物語云
[illegible]

○大納言伊尹のおとゝ八条摂政と申き九條殿一男なり四条作りとよなりとも世おぼえ大臣にまでなりて三条いとゝあてなる大納言三条十一月一日なりやまひ四月十四日にいとゝ頼信公とやきいわくてかくしまし[illegible]

[illegible]

中絶することのわれはかりいとうらみしかとも

出来なりぬ中くとゝ行末や事書

縁云一上のよはひ曲なりうらみ

そうんハわすれきとなり。をれ申よりして

さるれるをけんのこゝろにいとゝ同さ

なり。中くとゝなるぞいとゝわるり初めて

宮のハ。殊一向頼敬をしとゝ神注しし

ありけまよ何とをくいて世をあきなん

しけハ人と思うをそおれいとゝ思

をしハつれなくて年月をすこしら

うしてたまもとゝのみをもくそ。

いとやんとゝるきかりいのあまりよ

なくなれとそうれ
ハ和の内ちかいそ
ハ所ちくうなく
こそ月出られ事
日乃使よおいまし
てくさる芽ちよ
れハくれ行く
ひくんあてとう
ちかの里れ行く
うしし
ハくし
あるほちち
のさとあ色
しくくかと
世人なりけり
正徹云なくこのあれ
水のわれをそ
あるまき記也
くうまあハわ
れと為ら一あ
やうう条ちは
をハくしくきん
ロクの後とれ
をそるとて義

うくき社のよるみ
わきこのくあ
謙徳公ハかうり長也
公等の爵のうれ
公ありぬ後海ちう
くしまうけくも
あたよあうの
はあり生て
われたはの海を
為てなかのをく
るあり
いうくくくハかり
ひくくくよあき
くなりいくくく
をくるくくを
してくくも
いそれハあれを
ハ一き人ハあり
わわくくくり
ふ後ちあるをくふ
くくいあうくの
くくくくハたん
なり

謙徳公 一條摂政伊尹公 九条右丞相師輔五男 母藤原守淳郡女 天禄三十二薨 三十九歳

此公後撰集成撰れし時義人如なる
て和歌の下を行や謙徳公遥号也大臣
當官とて薨しまう人必ずを一国封
をうう仍中古堂東条必薨をう時錯也
するなり

九条右丞相 大政大臣太録三十二 母従女房 右次ハ従者 権大納言 能書
モロスケ コレニサ 栃改 ヨシタカ

負信公 師輔 伊尹 義孝 行成 三位之内也 権弘
ウウセイ

謙徳公 母藤原明親王
嘉光

拾遺 ろ五

わかれしいまハかをあうくきられ
詞出よ拾ハれける世後ハ世れをく侍りて
くくくあたを仍ハれくくありぱくくくハ
おりくくくハ云事の他人をくくて以を
あるあくくくとハ人ハくくく

○城 舟ノ棧也 楫ヶ嶽 同字 日本俗作梶ヶ嶽 木ノ名也

○曾祢好忠 先祖不見 寛和比人ト云云 任丹後掾云云 仍号ニ曾丹ト 勅撰ニ漏

○曾祢好忠〻〻者人数まゝ歌園融院の御日次幸に推参し〻てゆゑ有名なる者ゆゑ召れて今八雲の方よりやとなき者ゆゑ一条院御時に召れ乃さうらうとして江帥行せる中に道信実方長能輔親式部丞門弟なり好忠は七人とこそ八雲に召れて行れ撰上無名

○恵慶法師 先祖不見 寛和比人云云 播磨國薬師寺家集アリ

○拾遺 続後拾遺 源宗于 由良のとを 勅撰

○順和名 薄草 本草云毛久良 並厩集云すゝき一名

○詞書ハ河原院にて

曾祢好忠

勅撰ニ漏

ゆらのとを渡る舟人かぢをたえ
行くへも知らぬ恋の道かな

題しらず

由良のとを云云 紀伊國也 けふハ波
あらき海なれ海ゆゑ海ゆゑ
なるらんかぢをたえ行くへ
もしらぬ恋の道かな

恵慶法師

八重むぐらしげれる宿の人まちに
くるやとしるき秋の風

詞書ハ河原院にて

恵慶法師

八重むぐらしげれる宿の人まちに
くるやとしるき秋の風

詞書ハ河原院にて

人まちにくるやとしるき秋の風
とは何をかいふ歟

源重之　兼信子　兄兼忠為子云云

三条治部卿正四位下　賜源姓

兼忠　玉兼忠為子　左馬助　従五下

重之　相模守　従五下

兼信　賜源姓　三河守侍従　冷泉院坊時第乃

清和天皇―貞元親王

閑院

詞花七巻上

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけてものを思ふころかな

詞花　冷泉院乃長家卿の子なり　時代を

のがれ　住吉の社　なに人の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

昭和八年五月十二日

とに籠まりてくらしたくなり是ハ題
実方
清少納言
みやゝ花なれハ
のうちよりいとそ
なりけり
この歌ハ系統院の
内侍の時実方と
ある会梅ハ枝し
侍けるに山吹の
花と無礼の上より
かけこさせ給ハれ
よゝけるとうれ
笑よゝうとうり
はゝし
ミかきりの物のひ
きの花なれハと
やそとる人ハ
なし

題しらず　あり原　ハ関白兼輔の子ハ侍従中将ハ
まりもの花　清原深養父　乃下ハつゝ
花ハ門ハ外清の
みなもとの
ハ内侍　俊
ようなるハ　おのきやうれ
侍ハまたゆゝ
花と体しら
なりの乃ちん
しまうなれ
たるい行ら
いれ　ハりいのくらしき
よくもれ入て
みなり（きなり

思ひかねれ
ようれ心思ひ
ようとうつ
ゆうゝ侍る
る去也
元亨釈書云
利休次将芳義
孝者大師謙徳
公才四子也朝車隊
通法花　永絶
天延二年　秋深
通方便而遊異
香山室亞相芳
寺平居文善義
孝卒　正幾　義孝
宮中与義孝　娯遊
哦歌曰昔絢蓬莱
宮裏月今居掬泉
男中花　る
悲哀
万今とまたく
しらハあらう
のあらなを
あくまくめやん

芳系義孝　謙徳公三男母従五位下藤原伊尹女
右大将　従五位下　母中務卿具平親王女
武説　康平三八六配流土佐国云云此事不審
君ゆゑに　なくしくなくなれけれ
関白　世乃ちまり　てつらしきとある
後朝乃なる　ぬ　一度のあるを
今ハ　人と　見れしとまれてぬ
のあくもうなる　ハ　おられ　ハ
々大方　侍れて　思ふ　詞
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
しうあるもれ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

実方朝臣の歌に
心をしれあけてくらしたのめかりそ今宵
しの後

○袖中云所昭云
えやハいとゝきのこゝ
ろ山ようせてえ
やハ云とよめるかう
このいとゝきのやま
義法とゝ丘のさ
ゝたる山こハ非す
下野國のいとゝき山
也能因坤元儀三土
也考六帖云あちき
なやいとゝきの山ぬさ
も岩ものゝかられ
まゝとこゝろ法
契けむ心ゝくゝそさ
しもくさゝも思
ぬこそやハあ
ぬ
○野や高原の歌
のゝ
かりにはかなやの
うしの今宵ハ袖

○実方朝臣の六帖に
こゝのゝ
まくさを云
ゝのよつきて詠んに侍
る己ゝ思ふ身をこゝ
ぬ
まハ
ゝ
ゝ
ゝ

なり

○定家卿假名遣云
敢やハ伊吹の山左芝
六百番ニ云
あさましやなにしおはゝ
かれのすゝきかゝる
家もときあつまにてハ
ものゝ
花ニ云伊吹のさま
なてこゝろやとゝ
いふきをそらめ
右陳云右所ノ
しくさものとあれハ
詠やゝ判者後成卿
はゝとくさ家をき
あつまもりあん係
あまりうるやこ

よあれくやしんとまれれハ笑方いてん
うるゝくさたてそ
たとしそうはけん世られて笑方とれ
つまてまつれとて陸奥ちよすて
の花ニてまつれ
つるれてぱ世ん
國ニてうせ
とねらそ。ぱ
くらやとそれ
方雀ニて。殿上の
うす雀あうたり
藤原道信朝臣 恒徳公四男母謙徳公女
九条右大臣師輔 京極法性寺大政大臣為光従二位
恒徳公 母謙徳公女 左中将従四位下
正暦五年卒 二十三歳
道信

○拾遺
けふそこそれさ
やとも見ともそれ
八人なんこゝろ
拾遺ニ云
よけうしけ
あすはまち月
の初ちしけ
ふしをそれを
まの人ハ
そうけ
さむこゆきのそ
き出そこそ
れのこゝろ
のとりつるを
ものゝとそ

○後拾遺
ものゝ
河ニ
しるこそ
ゝさ乃道やこゝ
又ニ
くゝ
ものとハ後の
ものゝ
くやしき
とそれ
こそ

右大将道綱母 東三條入道関白兼家公室 藤原倫寧女 本朝右今参議人三人の内也云云

九条右丞相 又号法興院 入道 師輔 東三条入道関白

兼家 号傳 東三条入道関白 摂政 太政大臣 正一位 従一位 母高二位業忠女 儀同三司也 後拾遺

道隆 栗田関白 儀同三司号二条内大臣

伊周 儀同三司 内大臣

道雅 左京大夫 従三位

道兼 御堂関白 高内侍上り

道長 大納言

道綱 東宮傳 号傳大納言 母倫寧女 是右大将道綱母也

冬嗣 内大臣 嵯峨天皇 母藤原冬嗣女

長良 中納言 母藤原冬嗣女

高経 頭弁 蔵人頭 左兵衛督 内蔵人兵部卿 従五下 母藤原中納言女

惟岳 左馬頭 左大将道綱 母也 云云多人

倫寧 母藤原長能妹

昭宣公 拾遺愚抄

詞出る人道綱母

くもがくれにしかの山の月をまちいでつるかな

高内侍と詞花 後拾遺入

○

儀同三司母 儀同三司伊周公母也 従二位高階成忠女 中関白道隆公室 後拾遺入る内侍上り

伊周公 系図見 右大将道綱母下

内大臣正二位　内覽　五摂家

長徳二廿四有事左近大宰府ニ同三四

五位京号ニ帥内大臣儀同三司

私ニ云儀同三司三公准スル儀也伊周公初

例ヲ准ズルトカ代ニ云也みハ准擬

トモ云従一位ニ名ヲ儀三司ト云名ヲ

第ニ名ニ

ひとりのみまてしなれはこそ

問云。中宮ニ名陰ラレ給ケル

うわさもしるしなれはこそ

るるなのこりのこりなりたれ

すてやきえもうせやとは心にかけ

られあさましきなりやはと一首のきく

ゆへ

范島云大学寺ハ嵯

峨天皇の離宮ハ

て服履の行幸

和之耳三條西院

ようのアリ

國史ノ中ニ

負觀十八年清和

大后ヲ乳母ニ

行ていて寺ヲ

て大学寺ト名付

られ作り

八雲云公任ハ寛和

のはしり年ハ

今ハ

けるかなり。

清慎公曾孫　実頼　摂政関白太政大臣

敦敏　早世　母時平女　優理　能書三跡之内号優跡

廉義公関白太政大臣　権大納言正二位　別當能書和漢　権大納言正二位右大弁能書

頼忠　母同上号三条　撰公任遺跡和漢朗詠撰者　系院中号四条大納言

公任　母代明親王女

廉義公男号四条大納言

大納言公任　廉義公男　母代明親王女

定頼　母昭平親王女

龍門ハ絶て公ハ

問云。大学寺ハ

院ヲ

大学寺也。

けるかなり。

御殿ハ

なり。

云三及ハス 経信後頼 以下近し後成ヲ
なせまして八宮の
月日のこくあく
ぬとをれとる公任
ゑトさるとこそ
出まて後世ある
世ゆこあり元
世世余年のうや
きりの者七八世心
ゆあまてもさえ
あるきは一向すう
以ふのすや
順和名抄唐韵曰南
人名湍ノ呂反和名
兼名苑云瀑泉
名瀑湍瀑布遊名
山志云城門山西嶺之
間有氷形如瀑布

ちもと失せ寺そ
後は見乃まる
けしもいつめ
おりひてよめ
て行きし今れ
まりそをりつ
をりこ心
いくてゆ
ゆ使もし
けの國のま
ゆ成りつし

和泉式部 上東門院女房 大江雅致母越中守保衡女
イ内侍ヲ云 イ兵昌子内親王ノ乳母

和泉式部ハ上東門院
乃ゆ
てこのゆ
ゆ
冥入夏秋夢像
ゆ
ゆ
ゆ

一条院の御代の○
しこと云云
○
そしられのそとん
源氏このくに是
なきなり
なきやしんめまら
めり
○
万葉第二号削
皇子並記附置
始末人名
○
八天平のつりくの
そうしられなる
五来十九
初句はじめ五
句はじめ五
合八十四字はさく
もくれなく
○
三ケ月のそやうも
らもそうれ
みまくのうき
○
うそてこのうろ
あつまりかくられ月
のやそくれあるろ
けるやはのえし
○
後撰さみられなる
ゆめくをる月るれ
さやうもみもそ
くれたし
○
栗花巻五云云かくて内
のかめ此大臣三位と
きこゆるはらのうえ○
そうつさしのくゆめの
とこせるの人の迹
たえのくこのうたう
と以人のなの云栗
かうる後撰有温泉
八雲云有間万三郎
女短哥三八
大和人
ヤトリ居那
○
日本紀伊弉冊尊
生火神時被灼
而神退矣故於

このなり。一二乃月
紫式部
越前守為時女
上東門院女房
或鷹司殿女房
源氏物語作者
母摂津守為信
宜孝妻大弐
三位母
中納言兼輔
雅正
為時
紫式部
刑部大輔
従五下
越前守従五下
従五下
紫式部
新古雑上
詞書ふくやくしらてとうの月
人なん宇治にてしらてあるらのふ
てゝ月ナ日はしの月よきかいてうり侍
ゝたれをあるゝ。ものはかはの明なり。
但人なあいてやうてわれそれはいる
さあるゝ月乃ことくやとうめ人と月

たとへていはゝ月はこの月のあるとも
みるゝ月まきわ
そかれ乃ゝ
ゝもあれいるゝ
あるゝきゝとゝゝ
大貳三位
右馬門佐宣孝女
後二条院御乳母
母紫式部
大貳
成平
章ノ
妻タリ仍号大貳三位
三条右大臣
内大臣
左大弁左衛門督正五下
従四位
権中納言兼
右馬門督正五下
賢子大貳三位
高遠
定方
朝頼
為輔
宣孝
女
後拾遺二
有国
いあさ
系図
詞書
ゝ
ゝ
ゝ

紀伊國能登守
有馬村是紀貫也

いそのかみ
ふるの山なる
なとなる
ふるの山なる
たなはしの
なとなる
ふるの山なる
たなはしの
なとなる
ふるの山なる
たなはしの

月のかさもくまなくて
入まてを月はなをあ
いそりまの夜のよ
ふもおもしろしこゝハ
たれゆへかくまく
てのがれるねなまし
人のこゝろもうけん
源朝長和泉の守

ふりてよあるるなりぶそやをこハてね
かましものをとハやとやとも待もてもし
やと待やをこれしこゝ侍ハ梅しる
なりやをこしハ待隠るるなりあの心ハ
あく人をまちあけてさりともなりを
月をかくるるこゝろんをとつくんさ海たる
はをありたるこゝ歌ハ人と恨
こゝろをのなりこゝを見院ハ後ハ
忘ものこをとてと待いこゝをまてよるり
みしをやけるかくまてふとつくる
其心同し云此儀定而白

和泉守橘道貞母母和泉式部
上東門院

小式部内侍

橘諸兄公十一世孫一仲遠一道貞一小式部内侍
金葉
大江山ゝの方のをたにかまたをもとかすの天の橋立
詞書ハ和泉式部保昌ふたりして丹後国
ハ侍りをりけるを人のもとへ
小式部内侍
ハ侍りをりけるを中納言定頼
ハ侍りけるをまてしををさ
行事丹後ハ人つかしけるや使ハまう
てをやをりをくはりすんをあれ
をくこをけるとあるをあ
小式部内侍ハ母乃和泉式部ハ
まをてをあるを
とハ行しくあるれをを歌のかく

八雲云あのりしをしをしをて是
非橋海中に出タ
ハ侍ハ侍の和歌の格
を似ありをの題
新勅撰
大江山ゝをとをる
をのねハくのを越
てをををん
新後拾
をくこハをけをを
をををを大江山をを
をのをををくぬ
をを
後拾遺云小式部
内侍ハ二条后大
殿大臣ハをををを
ハをををて橋川
右大臣
人をれをををを
ねををし空のをを
ををのをををを
をん

ゝ
ぬれぬさかをゝまい
くむしひくさろ乃
ねすりの衣ゝ
たりゝ

○ゆきかゝる山の林
ゝ
ゝ

ゝ
ゝ

ゝ
ゝ

八雲みたつ風の
しるの柴

函谷のうつのの
方ゝ史記ニ見ル
逢坂ハ山城国ニ
むすハ四位殿の
すかう奥ニ有
えとの中ニ入り
附四境祭ニて帝
王のしるし
なり逢島
ハ印とつけて四の
せきをいうてする
条方ゝ有ハさのハ
さ二の関也云云
四境とハ東ハ相坂
南ハ立田北有乳
西ハ宍庄四周ハ
坂坂鈴鹿彩田
仮廉頂ハ坂ハ
彩田ハ鈴鹿ハ
鈴鹿ハ行て逢ハ
坂龍田ハ鶏也

孝ものたりなとそのうてをわるみちる
うのさらん雲ハこれをなり上(ま)なり

清女納言 清原元輔女ト云 深養父曾孫云云
一条院皇后宮女房

枕草子ハ人先乃後ハ四國の者ハ
ハれてうてと云云

世

ねとこめて鳥なねハくるゝ共よゝ
河ハ逢ハ大納言行成物ゝ
ゝ内の侍ハ
ゝてつとめて雪の
とハれとせて侍
むすのねハ函谷
けてうしゝ

續世語ニ一条院の
皇后宮ハ此せゝの
ゝ院のゝ
ゝ

ゝ
ゝ
ゝ

六番物語　拾遺并後撰より入

いなばの月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

陸奥守行平の子とつたり。行平と一所
に業平ともに在原氏にて絶えてこの名きゆ
まなくまれに安中の家にのこりて
いたりとぞ。されどそれも絶もとやい
はんとぞ。松平伊豆守正信すゝめ給ふ
権中納言定頼 公任卿男 母昭宣公女 歌五十
文に書るゝ人と云云
名ゐを宇治の川霧とよめるなり
宇治はまりてあるとあり人世の海
豊の八十宇治川の網代なるいさり火の行末
そゝとゝとゝとゝ網代とる

○六月より最の氷魚八月まで
氷魚八月のころ
網代八月九月の
ゐれとれ九月の
ゐるゝ宇治のあしろ
人借に触する
網代くれあり
のこれ宇治
はあるとゝ
ゐあること
して網代とる

さゝなみ
花鳥文内膳司文云
山城國近江國氷
魚網代各一処其
氷魚昭九月至十
二月廿日借之今
案近江の田上川網
代はなれられを
山城の宇治にそ
ゝゝゝゝり

○六月 つゆさ
ゝゝ川のゐもの
ゐ水ゐそるあし
ゐるゝ

拘なり。宇治の田上川ゝてゐれ水魚
宇治川ゝそゝゝ云云。宇治の乃ゝゐ宇治
山ゐゝきゝゝゝゝて。河上此事もゝれゝ
きゐゐゐ

無改号相撲ト云云一説ニ母、能登守藤原保
亂女ト云云
恨みむなしき神なれば
永承六年内裏の合ありしこれ
くちるむなしき名をたてしかれとぞ
あいにくしいちやくぶんもせあ
てるくきしをぞ
くちきうめて
ぞ山のうへ
とまりぬ神にあらのと
ぞ
思ふ
くちぬくきぞ
きてあるや
よくらぬ
くちぬ
なり三光院
文字
あるふ
ことを

百人一首抄中終

てとくうハ意のだ
うしまるさかうる
うしうと

思ふ
くちぬ
きてあるや
よくらぬ
くちぬ
なり三光院
文字
あるふ
ことを

百人一首抄中終

857
147

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄 3巻』 請求記号 857-147

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄 3巻』 請求記号 857-147

ガラス使用